

『行人修道簡邪入正止観法門』(『五教止観』)の「華嚴三昧」について

小林 實 玄

法蔵が「華嚴三昧」の観行を説くものには、『法界観門』をそのまま継承する『華嚴三昧観』があるが、そのほかに『五教止観』即ち『行人修道簡邪入正止観法門』一卷(以下『修道止観法門』と云う)の内に説いている「華嚴三昧門」がある。いま法蔵が著わす前期のいくつかの撰述において、これらの撰述は、この『修道止観法門』に説かれる「華嚴三昧門」の観をその根底としていると考えられるのであり、このことについて論じたいと思う。この『修道止観法門』が法蔵の撰述であることは既に論定されているところである^①。

まず、この『修道止観法門』の内容をみれば、(一)小乗の「界分別観」(法有我無門)、(二)大乘の「無生観」「無相観」(生即無生門)、(三)「事理円融観」、(四)語観雙絶門、と、(五)「華嚴三昧門」の五門の組織をもつて説かれている。この五門は『五教止観』においては五教判の五教に配される止観のように考えられるが、しかしその内容に注意すると実はそのこと

よりはるかに観門の修行に関する深い配慮を払っているのである。即ち、これらの観門は、師の智儼が説く観門を行ずるところにおいて、法蔵が「行人」の「修道」の法門として説示するものであり、「五停心観中の界分別観」や「無相観」は『孔目章』に説かれる観のなかから摘示し、「事理円融観」は同じ『孔目章』の「通観」などの如来蔵の観をもつて説くものである。それは、智儼が多くの諸観をすべて「一乗に入る方便」とする説をうけつゝ、その中から「華嚴三昧」に入る観門として四門を組織づけたのであるが、これは法蔵自らの行じた観行において示したものであると考えるべきであろう。

ところで、この『修道止観法門』は『法界観門』を根本とするものであり、その「華嚴三昧」を説くについて、須先打^②計執、然後方入^③円明。若有^④直見^⑤色等諸法從^⑥縁、即是法界縁起也。不^⑦必更須^⑧前方便也^⑨。

と示すのであるが、ここに法蔵のこの觀の論述の立場がある。

即ち、まず、右の「直ちに色等の諸法が——即ち法界緣起なり。」と説く所においては、この「華嚴三昧門」が『法界觀門』の「真空觀」「理事無礙觀」「周遍含容觀」の三重の觀を一つの觀として説いているものであることが知られるであろう。

次には、また、右の「必ずしも前〔四門〕の方便を須いず。」と言う所では、「華嚴三昧」の説示の中で、その方便として説いた前四門の内容を、巧に『華嚴三昧』の内に摂し、この中で繰り返し説いていることが注意されるのである。

ここにおいて、この『修道止觀法門』は『法界觀門』について、法蔵が自らの立場で改めて論述したものであることを理解することができるのである。

ところが、この『法界觀門』と『修道止觀法門』とにおいて、その論述に関する異りとして注意すべきことは、『法界觀門』においては「理事無礙」と説かれることが、『修道止觀法門』ではその無礙が「空有無礙」と説かれていることである。これは如来蔵に関する釈解であることは言うまでもない。そしてこの『修道止觀法門』では、「有空無二一際円融」とも「空有即入全体交徹」とも、「空有無二即入融通」等と説かれているのであるが、これらの「空有無礙」の論拠はこ

こでは、

事理兩門円融一際者、復有三門。一者心真如門、二心生滅門。心真如門者是理、心生滅門者是事。即謂空有二見、自在円融、顯不同、竟無障礙。言無二者、緣起之法、似有即空、空即不空、復還成有。有空無二、一際円融、二見斯亡、空有無礙。と説く、「似有即空」と「空即不空」とあると考えられるのである。

そこでいまは、まずこのことに關連することから考えることにしよう。

はじめに、この「緣起之法、似有即空」に關するものとしては、同じく「華嚴三昧門」において、

云何方便入法界耶。答。言入方便者即於緣起法上消息取之。何者、即此緣起之法即空無性。由無性故幻有方成。……。

等と説かれる「於緣起法上」と言うことについて考えたい。

即ち、この緣起法に關して注意すべきものに、『華嚴經問答』がある。この『問答』は、法蔵が『華嚴經』の論究に關する重要な撰述であり、これも亦、彼が觀門を根底として三乗と異なる一乘の義を明らかにするものである。いまこの『問答』において、その緣起の論釈は、根源的には『華嚴經』「十地品」の「十二緣起觀」について述べられる説示にある。これは勿論、智儼の釈解をうけつつ、また自らの立場において説くものであり、「十二因緣即一如來藏」と言う如来蔵の立場

で釈するものである。その十二縁起観は十観として説かれて

る。

いるのであるが、それらの解釈を通して認められることは、「空・無相・無願」の三空門と、「分別・依他・真実」の三性並にその一無性性の三性門とをもつて釈することである。その細論は別にゆづることにして、その縁起観の結示は、

問。三乗縁起一乗縁起有何別耶。答。三乗縁起者縁集有縁散即無。一乗縁起即不爾。縁合不有、縁散不無故。

と説かれる所にあり、しかも、

十番十二因縁観略示如_レ是。広説如_二論中三番説_一。

と論じているが、その三番の説に関する『問答』の釈は、

以_二自四縁等理為_二此観体。同三性門為_二順観体、以_二三空門為_二逆観体_一。問。其相云何。答。遣_二外執_一以施設。所執実即空、分別性從縁以_レ有為_二依他性_一。依他性所詮之実為_二真実性_一。如_レ是為_二隨情安立三性十二因縁法_一。見_二如_二此理事二名_一為_二順観也。若以_二三空門_一……

と述べているところである、この釈をみると、法蔵が縁起を三性で論ずる根本がここにあることを知るのであり、所謂縁起はその依他性における似有・幻有と空・無性とにおいて説くことを基本としていることが知られるのである。

なお、この三性によって理事無礙を説く場合の所論に『華嚴教分記(『華嚴五教章』)』の「義理分齊」中の「三性同異義」があるがあるが、これも亦、この問題に関連するものである。

次には、さきの「空即不空」に関するものとして、『華嚴玄義章』に注意したい。『玄義章』はこれまた法蔵がその根底を解行において、十門をもつてその玄義を論ずる重要な論述である。

いま、その「縁起無礙門(第一)」は、その観行を根底として「法界縁起」を論ずるものである。それは、(一)空不空門、(二)相在不在門(三)相是不是門の三門を開いて論ずるのであるが、その中相在不在門は相入、相是不是門は相即の縁起を説く「法界縁起」であることに問題はない。ところが、その中に空・不空門を論じていることがいま注意されるのである。それは、

空不空門。謂一切皆空無有毫末相。以縁起無性故。虚相尽故。或一切不空。以_二空為_二諸法_一故。以_二非情謂之無故_一。不_レ異_二色等_一故。或二義無礙故。或両門俱泯故。並可_二準思_一。

と云うのであるが、ここでは空・不空に関する四句によってその空有無礙を論定しているのである。

そして、これは法蔵が法界縁起を説く場合に、通例相在・相是の二門において説くのと異つて、この空不空門をも論じていることについては、所謂彼の観行の立場においては常にそれがふくまれてあるものであることが注意されるのである。

即ち、このことは、いま『修道止観法門』中の「華嚴三昧門」が、『法界観門』の三重の観の立場をうけてそれを一観として示していると理解することにおいて、その意味をしることができるのである。

次には、『華嚴教分記』について、『修道止観法門』との関連を考えよう。

まず、その「三性同異義」における「問答決択」の四句分別の論と、「華嚴三昧門」における縁起に関する遮情と表徳との四句とは、その論述において関連するものであることはすでに指摘されているところである。しかも、「三性同異義」においては、「三性一際挙一全収、真妄互融性無障礙^{①②}」と真妄交徹を説き、『修道止観法門』では空有交徹と説く異りはあつても、「縁起之法即空無性、由^{①③}無性故幻有成」等の所説は法蔵の所論として三性に依つて説く縁起であることは、さきに指摘したところである。

また、「十玄門」の十門の列示について、『華嚴教分記』は(一)同時具足相応門・(二)多相容不同門・(三)諸法相即自在門・(四)因陀羅網境界門と云う順序で論じているが、この十門の列順は他の撰述において改変を重ねている中で、「華嚴三昧門」が「同時頓現無前無後」「同時即入」を説き、そこに「帝釈天珠網」の観を説いていることは、両者が同じ立場において説きあらわされていることを知るのである。

更に次には、観門の著述として重要な『華嚴三昧観』との関連を考えておきたい。

ここでは、まず、『華嚴三昧観』の中で、「法界観門」の三重の観の次に説く「色空章十門止観」が注意される。即ち、この止観が「色空章十門止観」と標示されることについて、『修道止観法門』の「華嚴三昧門」で、

若有^{①④}直見^{①⑤}色等諸法從^{①⑥}縁、即是法界縁起也。

と言う論説において理解することができるのであり、また、この「色空章十門止観」も『法界観門』を法蔵が改めて一観としたものであり、このことによつて更にこれら兩観が関連をもつ観門であることは明らかである。

また、その内容においても、「色空章」は理事によつて、『修道止観法門』は空有によつて説くという異りはあるが、しかもともに「言亡解絶」の立場を「理事無礙観」の次に置いていることは、『華嚴三昧観』中の他の観とは違つて、これら二つの止観が同じ立場にあることが一層明らかにしられるのである。

なお、その他、『遊心法界記』は勿論、『妄尽還源観』についても論及しなければならぬのであるが、しかしこれらは法蔵の後期の撰述であり、今は前期の諸章における問題を指摘するにとどめたい。ただし、『妄尽還源観』については、この「華嚴三昧門」において、

問空有無二即入融通者、如何復云見眼耳等即入法界中耶。
答。若能見空有如是者、即妄見心尽。方得順理入法界也。何
以故、以縁起法界離見亡情繁興万像故。

と説かれるところに、この観が改めて撰述される始源を認めることができると思われる点を付記しておきたい。

このように、法蔵の前期の諸撰述をよむとき、この『修道止観法門』は『遊心法界記』の草稿であることにとどまらず、法蔵が論説する重要な観門として、他の多くの撰述の基底となっている、甚だ注意すべき撰述であると考えねばならないであろう。

1 「華嚴五教止観」撰述者論攷、結城令聞氏(宗教研究新第七卷第二号)

2 『五教止観』の題名は後人が与えたものである。(同右参照)

3 「華嚴宗初期の修観の状況について」拙稿(印度学仏教学研究 第二十二の二)

4 正蔵、四五、五一二、中。

5 正蔵、四五、五一一、五一三。これらは、順次、第三事理円融観、第四語観雙絶門、第五華嚴三昧門に説かれるが、これら

三観における空有無礙の問題については別に考える。

6 正蔵、四五、五一一、中。

7 正蔵、四五、五一二、中。

8 正蔵、四五、六〇五上、六〇六上。

9 正蔵、四五、六〇六、上。

10 正蔵、四五、六〇五、中。

11 正蔵四五、四九九上、五〇一下。

12 正蔵、四五、六二三、上。

13 空有に關しては「玄義章」の他の門にも説かれているが、今は略する。

14 前掲、「華嚴五教止観」撰述者論攷。

15 正蔵、四五、五〇一、下。

16 「法蔵の一乗教義の論成について」拙稿(竜谷大学論集第四百号)

17 正蔵、四五、五一二、下、五一三、上。

18 「華嚴三昧観の研究」拙稿(印度学仏教学研究二十四の二)

参照

19 同右。

20 同右。

21 正蔵、四五、五一二、中。